

## 『忠度集』の法輪寺詠について

瀬 良 基 樹

### はじめに

平安末期に、憂き世としての閉塞感の漂う現世から逃れ救われるための手段として人々が求めたものは、仏教の世界であった。人々は、出家遁世することに生きがいを見出していく。

このような時代の影響を受けて、『忠度集』にも仏教を取り上げた歌がいくつみられる。八五、八六番の法輪寺詠の贈答歌と、九五―九八番の釈教歌がそれである。前者は法輪寺に籠った人が或る人に贈った歌とその返歌（忠度の代作）であり、後者は『法華経』の経文の文句を和歌に詠んだものである。これらは、深遠な仏教の真理を追究した宗教性の濃いものというより、仏道をテーマにしながらも、機知を込め技巧を凝らして歌を詠んだ、趣味性の強いものである。ここでは、『忠度集』の法輪寺詠を取り上げながら、その表現上の特色を明らかにしようと思う。

なお、使用した本は、八代集は『新日本古典文学大系』、『万葉

集』源氏物語』和漢朗詠集』は『新編日本古典文学全集』、『伊勢物語』『栄花物語』は『日本古典文学大系』、八代集以外の勅撰集・私家集・私撰集は『新編国歌大観』によった。

### 一

まず、『忠度集』の法輪寺詠を挙げてみよう。

法輪にこもりたる人の、申しおくりて侍りける

おもひたつ心よわくもぬるるかな草のいほりにすみぞめの袖

（雑、八五）

返し、人にかはりて

草のいほはおもひやるだに露けきにさぞすみぞめの袖はぬる

らん

（雑、八六）

二首ともに、「草のいほり（草のいほ）」と「すみぞめの袖」を詠み込んでおり、「すみぞめ」は『墨染』と「住み初め」の掛詞となっている。

八五番の歌は、法輪寺に籠ったばかりの人が或る人に贈った歌

で、出家を決意して実際に法輪寺に籠って見たが、住み初め気弱くも露に濡れた草庵の中で僧衣の袖を涙で濡らしているというもので、出家当初の意志が鈍りがちなことを嘆く歌である。

それに対して八六番の歌は、八五番の歌の返歌として忠度が代作したもので、「露けき」の「露」は「草」の縁語で涙を喻えている。あなたが籠っている草庵は想像するだけでも露に濡れた湿っぽいものなのに、実際に入ってみると、さぞ住み初めは僧衣の袖が涙で濡れることだろうと詠んで、出家当初の俗世と縁を絶つことの難しさを思いやった歌である。

法輪寺詠は、『後拾遺集』の法円法師や源道済の歌以来、赤染衛門、道命法師、公任、俊忠・俊成父子、西行らの多くの歌人に取り上げられている。

法輪に道命法師の侍りけるとぶらひにまかりたる夜、呼子鳥の鳴き侍りければよめる

し (後拾遺集、巻二春下、一一一、法円法師)

法輪にまゝいりてよみ侍りける

年ごとにせくとはすれど大井川むかしの名こそなを流れければ (後拾遺集、巻十八雜四、一〇五九、源道済)

法輪へまうでけるに、嵯峨野の花おもしろくさきて侍りれば、みてよめる

秋の野の花みるほどのこゝろをばゆくとやいはむとまるとや

いはん (詞花集、巻三秋、一一三、赤染衛門)

春より法輪にこもりて侍りける秋、大井河にもみちのひまなく流れけるをみてよめる

春雨のあやをりかけし水のおもに秋はもみちの錦をぞ敷く

(詞花集、巻三秋、一三四、道命法師)

母の思ひに侍りける秋、法輪にこもりて、あらしのいたく吹きければ

うき世にはいまはあらしの山風にこれやなれゆくはじめなるらん (新古今集、巻八哀傷歌、七九五、皇太后宮大夫俊成)

これらの歌は、法輪寺周辺の風物として、呼子鳥、嵯峨野の秋の花、大井河の紅葉、嵐山の山風などを詠み込みながら、都を離れた非日常の情趣的な美の世界が鮮やかに捉えられている。

それに対して『忠度集』の法輪寺詠は、直接に法輪寺に籠って仏道修行に入ろうとする時の心情を歌っており、歌枕としての法輪寺を詠んだこれらの歌とは趣を異にしている。

近藤みゆき氏は、「身と心と仏道とをまざまざと見つめ、その『揺れ』をあからさまに歌に託していくあり方」は、能因あたりから見られ、『世をそむく』人々と『思ひをやる』人々の双方が、相手側の世界への思いを歌に託し、歌を仲立ちとして交流する」あり方は、「浄土教信仰の浸透を背景に、世をそむくことが、身近で真剣な問題となった十世紀後半」からだとされている。『忠度集』の法輪寺詠も、このような和歌の伝統を受け継ぎながら、そ

こに特有の美意識を込めようとしている。

## 二

『忠度集』の八五番の歌には「草のいほり」、八六番の歌には「草のいほ」が用いられている。『和名抄』には「菅」を「いほり」、「庵」と「庵」は「いほ」と読ませている。

菅 唐韻云菅余傾反日本紀云和名伊保利草管地

庵室 唐韻云庵烏含反方言屢云草庵和名伊保草舎也

廬 毛詩云農人作廬以便田事刀魚反和名伊保

『万葉集』では、「廬（いほり、いほ）」や「仮廬」（かりいほ、かりほ）は、農事や旅宿用の仮小屋をさしている。

平安時代になると、「庵（いほり、いほ）」は『千載集』以後多用されるようになる。勅撰集を調べてみると、「いほり、いほ」百十九例、「仮いほ、仮のいほ」仮ほ、「仮ほのいほ」二十七例、「草のいほり、草のいほ」二十五例、「柴のいほり、柴のいほ」十四例、「杉のいほり、杉のいほ」八例、「笹のいほり、笹のいほ」一例、「苔のいほり、苔のいほ」各二例、「紅葉のいほ」一例、「つたのいほ」各一例、合計百九十九例となっている。『玉葉集』、『新古今集』、『新統古今集』、『新千載集』、『風雅集』の順に多用されている。部立てみると、雑、秋、髣髴の順に多く、祝教の部がそれに続いていく。結局この「庵」という語は、平安末期以降特徴的に使われていることがわかる。

「庵」は、和歌集以外にも、『大和物語』、『宇津保物語』、『枕草子』、『狭衣物語』、『とりかへばや物語』、『夜の寝覚』、『栄花物語』などに用いられている。「草のいほり」は、『伊勢物語』、『枕草子』、『夜の寝覚』、『今昔物語集』などに使われている。『栄花物語』「たまのうてな」の巻には、「草菴に目を塞ぐ間は、即ち連菴に<sup>あぢ</sup>結ぶ程なりけり。」と、『往生要集』大文第二の一を受けた形で用いられ、この語は漢語「草庵」の訓読語として使われている。

ところで、『源氏物語』には、「草の庵」は五例用いられている。(1) (明石の入道の尼君への手紙)

この月の十四日になむ、草の庵まかり離れて深き山に入りは  
べりぬる。 (若菜上)

(2) (薫が宇治の八の宮邸を訪れる)

げに、聞きしよりもあはれに、住まひたまへるさまよりはじ  
めて、いと仮なる草の庵に、思ひなし、ことそぎたり。

(3) (八の宮の薫への贈歌)

われ亡くて草の庵は荒れぬともこのひとことほかれじと思  
ふ (椎本)

(4) (薫の八の宮への返歌)

いかならむ世にかかれせむ長きよのちぎり結べる草の庵は  
(椎本)

勅撰集・山家集にみられる「庵」の種類とその用例数

山家集	計	新編古今集	新拾遺集	新拾遺集	新千載集	風雅集	純後拾遺集	純千載集	玉葉集	新後撰集	統拾遺集	統古今集	純後撰集	新勅撰集	新古今集	千載集	詞花集	金葉集 <sub>三卷</sub>	後拾遺集	拾遺集	後撰集	古今集	勅撰集
8	31		3	1	2		2	3	7	2		2	2	1	2	3	1						いほりい
7	88	13	1	4	10	10		7	12	3	7	2	5	2	9	1						2	いほ計
15	119	13	4	5	12	10	2	10	19	5	7	4	7	3	11	4	1					2	いほ計
	17	3		1	3	1		1			2		1	1	1		1			1		1	いほほ
	10	1	2	1	2			1				1									2		いほほ
	27	4	2	2	5	1	2			2	1	1	1	1	1		1			1	2	1	計
5	12				2	1			1	1		1	1	1	1	3				1			草のいほりい
	13				1			3	1	2	1	2		1	1		1						草のいほ計
5	25				3	1		3	2	3	1	3	1	2	4		1		1				柴のいほりい
1	10	3	1					2	1					3									柴のいほりい
6	4	1		1				1							1								柴のいほりい
7	14	4	1	1				3	1					3	1								計
	3				1			2															杉のいほりい
	5	1			1										3								杉のいほりい
	8	1			2			2							3								計
1																							笹のいほりい
	2				1										1								笹のいほりい
1	2				1										1								計
	1														1								苔のいほりい
	1														1								苔のいほりい
	2														2								計
	1		1																				紅葉のいほりい
	1	1																					紅葉のいほりい
28	199	23	8	8	18	16	3	12	27	8	12	6	11	5	23	9	2	1		2	2	3	計

(5) (横川の僧都の妹尼の中将への返歌)

うつし植ゑて思ひみだれぬ女郎花うき世をそむく草の庵に

(手習)

(1)の「草の庵」は、明石の入道が今まで住んでいた明石の浦の寺をさす。入道は尼君が明石の君を懐妊した年の二月に見た、若君(明石の女御)が国母になるという夢の実現を信じて掃磨に下り、明石の浦に居を構えて、勤行の時にも、この夢が正夢になることと、自分が極楽往生できることを祈ってきた。そして、明石の女御に皇子が誕生した今、この夢は実現する見通しがたち、入道はさらに極楽往生をめざして修行を積むべく、今の住居を離れて、深山に入っていくこうとする。

(2)、(3)、(4)の「草の庵」は、道心厚い簡素な八の宮邸をさしている。(3)の歌の「ひとこと」は「一言」と「一琴」を掛け、また「かれ」は「枯れ」と「離れ」を掛け、(4)の歌の「よ」は「世」と「夜」を掛けている。また、(3)、(4)の「枯れ」、(4)の「結べる」は「草」の縁語となっている。「古今集」の喜撰法師の歌にも、

わが庵は宮この辰巳しかぞ住む世をうち山と人はいふなり

(卷十八雑歌下、九八三)

とある、宇治の住まいである。(3)と(4)の八の宮と蕪の贈答歌については、八の宮は、自分の死後この「草庵」は、蕪にとつて仏道修行の場としての存在価値を失おうとも、二人の娘の幸福を支える場となること、つまり蕪が娘達の後見をしてほしいと願ひ、蕪

もそれを了承している。

(5)の「草の庵」は、横川の僧都の妹尼が住む草庵をさしている。横川の僧都の一行に助けられた浮舟は、「伊勢物語」に登場する惟喬親王が隠棲した比叡山の良のよしとち小野にある妹尼の草庵で心安らかに暮らしていたが、妹尼のかつての婿の中將に覗き見されてしまう。この歌は、中將が秘かに浮舟の許を訪れて、

あだし野の風になびく女郎花われしめ結はん道とほくとも

(手習)

と詠んで贈った歌の返歌を書くことを浮舟にそそのかしかねて、妹尼が中將に返した歌である。「女郎花」は浮舟の比喩である。

中將は「女郎花」を、

をみなへしおほかる野べにやどりせばあやなくあだの名をや

たちなん (古今六帖、第六、三六六三、さののよしき)

とあるように、「あだし野」に咲く花、つまり恋に生きる女として捉えようとしている。妹尼も中將に調子を合わせ、そのような浮舟を出家させることに躊躇していると訴えている。浮舟にとつて「草の庵」は、仏道の世界に生きるか恋愛の世界に生きるかの心の葛藤を強いるものであり、むしろ否応なしに自分を俗世間へ引き戻そうとするものであった。

『源氏物語』に用いられた「草の庵」は、「憂き世」を離れて仏道修行に励むことのできる、都と深山の中間に位置する山里であり、心の平安を得られる場所であった。しかし、それも人里に

近いこともあって、一時的なものでしかなかった。

### 三

次に、「草のいほり、草のいほ」を歌語として詠み込んだ勅撰集の歌についてみてみよう。

#### 題知らず

今日見れば玉の台もなかりけり菖蒲の草の庵のみして

（拾遺集、卷二夏、

一一〇、よみ人知らず・賀茂保憲女集、なつ、四九）

勅撰集で「草の庵」が初出する歌である。端午の節句の今日は、どこを見渡しても軒端に菖蒲を葺いた草庵ばかりで立派な桜閣はないの意で、菖蒲を軒に葺いた家を質素な草庵に見立てている。

この歌は「玉の台」と「草の庵」を対比させた点に特色があり、この歌を本歌として、

かりそめのくさのいほりにやどりてぞたまのうてなのしるし

とはなる

（行摩大僧正集、六二）

が詠まれている。この行摩の歌は、「法華経」信解品の「長者獅子の喩え」の獅子が草庵に止宿して仏の御利益を得た話を背景にしている。

同様に、「長者獅子の喩え」に拠った歌として、

#### 止宿草庵

草の庵に年へしほどの心にはつゆかからんとおもひかけきや

（統拾遺集、卷十九

釈教歌、一三四六、選子内親王・発心和歌集、二八）

がある。この歌の「草」「かかる」は「つゆ」の縁語で、「つゆ」は仏の加護を喩えている。歌意は、獅子が父の長者の屋敷の門外の草庵で長年過ごしていた時の心には、仏の加護を受けるとは予想していなかっただろうというもので、長者は釈迦を、獅子は衆生を喩えており、仏徳の偉大さを詠んでいる。

次に、「和漢朗詠集」の

闍省の花の時錦帳の下

廬山の雨の夜草庵の中

（下巻、山家、五五五、白居易）

を踏まえた歌をあげてみよう。

#### 題知らず

さみだれに思ひこそやれいにしへの草の庵の夜半のさびしき

（千載集、卷三夏歌、一七七、延久第三親王輔仁）

親王は、五月雨の静かな音を聞きながら、今旧友は宮中の佳宴に出席して時めいているのに、自分は辺境の山中の草庵に一人寂しく籠っているという白楽天の不本意な境遇への嘆きに同感している。五月雨は、白楽天の、延いては作者の孤独感を強めている。

入道前関白、右大臣に侍ける時、百首歌よませ侍ける郭

#### 公の歌

昔おもふ草のいほりの夜の雨になみだなそへそ山郭公

（新古今集、卷三夏歌、二〇一、皇太后宮大夫俊成）

俊成は、自分を白楽天と重ね合わせて、自分がかつて宮中ではなやいだ生活を送っていた頃を思い出して、今の草庵の中における落魄した生活への悲哀感を強めている。漢詩の世界に歌語としての「ほととぎす」を詠み込んだ点、懐旧の情と孤独感がより極まっている。

#### 四

忠度の法輪寺詠には、「すみぞめ（の衣）の袖」が歌われている。「墨染の衣」は、「古今集」以来哀傷の部に多く詠まれているが、喪服の意で用いられたものが多く、この歌のように僧衣の意で広く使われるようになったのは、『拾遺集』の頃からである。

ところで、忠度の法輪寺詠は、「草のいほ」と「すみぞめの袖」を結びつけて詠んでいる。このような歌は数が少ない。

源清雅九月ばかり様変<sup>（二）</sup>えて山寺に侍けるを、人の問ひて侍ける返事せよと申付ければ、よみてつかはしける

思ひやれならはぬ山にすみぞめの袖に露<sup>（三）</sup>をく秋のけしきを

（千載集、巻十七雑歌中、一一四八、源清雅）

この歌は「すみぞめ」に「墨染」と「住み初め」を掛けている。作者は山寺に籠り始めたばかりの頃で、秋の季節感と出家当初の寂寥感から、「すみぞめの袖」に涙している。この歌の心情は、「忠度集」の法輪寺詠の贈歌（『忠度集』八五番の歌）のそれに通じるものがあり、共に「すみぞめの袖がぬる」、「すみぞめの袖に露

をく」と似た表現を用いて、出家直後の修行一途の生活に入ることの困難さを訴嘆している。

#### 五

袖が涙で濡れるという表現は、『刀葉集』にすでにみられる。

今よりは逢はじとすれや白たへの我が衣手の乾る時もなき

（巻十二、二九五四、作者未詳）

平安時代に入ると、「露」を涙の比喩と捉え、「袖に露置く」という表現が多用されるようになった。さらに、「袖の露」と同類のものをあげて、両者を対比しながら「袖の露」の持つ意味を強調する技法を生み出した<sup>（四）</sup>。それは、「露」の宿る二つのものの連想により、一首の情調をより奥行きのあるものにする手法でもあつた。

唐衣袖くつるまで置く露はわが身を秋の野とや見るらん

（後撰集、巻六秋中、三二三、よみ人しらす）

#### 題不知

わが袖を秋の草葉にくらべばやいづれか露のおきはまさと

（後拾遺集、巻十四恋四、七九五、相模）

前者は、「唐衣」の「袖」と「秋の野」を同類のものとして、共に露の置く存在とみている。後者は「わが袖」と「秋の草葉」を同類のものとして、共に露に濡れるものとみている。両者共に「秋」に「飽き」を響かせている。

また露は、袖に置くだけでなく、「草のいほり、草のいほ」に置く場合もあった。

むかし、おとこ、臥して思ひ、おきて思ひ、思ひあまりて、

わが袖は草の庵にあらねども暮るれば露のやどりなりけり

(伊勢物語、

五六段・新勅撰集、卷十七雑歌二、一一二三、業平朝臣)

業平の歌の「露」は「草」の縁語で、涙の比喩となっている。夕方に「露のやど」るものとして「袖」をあげ、それと同類の「草の庵」を対比させて、夕暮れ時に暮る女を思う男の切ない気持ちを印象づけている。

## 六

ところで、「草のいほり、草のいほ」と「袖の露」を取り合わせた勅撰集初出の歌は、

大峰の生の岩屋にてよめる

草の庵なにつゆけしとおもひけん漏らぬ岩屋も袖はぬれけり

(金葉集、卷九雑部上、五三三、

僧正行尊・行尊大僧正集、一一〇、初句「ささのいほは」)

である。この歌の上の句は、前掲の業平の歌を踏まえている。「漏らぬ岩屋も」の「も」とあるように、行尊は「草の庵」において袖を涙で濡らしている。行尊の「草のいほり」を詠んだ歌をあげると、

かへりせでにげてまかりにき、これはいほのはらにか  
きつけ侍りし歌

おもひきや草のいほりのつゆけさをつひにすみかとのむべ

しとは

(行尊大僧正集、五)

つかつといふところにて、やどるべき所には、人みなか  
ねてやどりにければ、ふつとひとやどをかさねば、やど  
るとて、もとやどりたる人に

かりそめにくさのいほりにやどされよつゆのうき身のおきど  
ころなし

(行尊大僧正集、八〇)

これらの歌には、作者の諸国修行の苦難が語られている。「金葉集」の行尊歌は、結局「草の庵」における修行の辛さから生じる袖の涙と(露の)「漏らぬ岩屋」での袖の涙を対比しながら、後者が法悦の涙であることを発見した驚きが述べられている。

次に、この行尊の歌を本歌としたものをあげよう。

みたけより笹のいはやへまゐりけるに、もらぬいはやも、  
とありけんをりおもひいでられて

露もらぬいはやもそではぬれけりときかずはいかがあやしか

らまし

(山家集、九一七)

神な月の比、法印良守しやうのいはやといふ所にこもり  
侍りけるにつかはしける

いかばかりしぐれに袖のしほるらんもらぬいはやのむかし恋

ひつつ

(玉葉集、



前者は行尊の修行を追体験した心境を詠んでいる。後者の涙は、修行の厳しさと同時に行尊を慕う心情から生じるものであるう。

七

「露をく袖」と波や時雨の雫に濡れる旅寝のための「庵」を對比させた歌も、『千載集』の頃からみられる。

家に百首歌よませける時、旅の歌とてよみ侍りける

あはれなる野鳥が啼の庵かな露をく袖に波もかけけり

(千載集、卷八驛旅歌、五三一、皇太后宮大夫俊成)

撰政右大臣家の歌合に旅の歌とてよめる

旅寝する庵を過ぐるむらしぐれ名残までこそ袖はぬれけれ

(千載集、卷八驛旅歌、五三九、藤原資忠)

俊成の歌は、涙で濡れた「袖」が「庵」にかかる「波」の雫のために一層濡れたと言い、資忠の歌は「むらしぐれ」が「庵」に降っている時は勿論「袖」が濡れ、それが通過した後もの寂しさのため涙で「袖」が濡れたと述べて、共に旅情の涙を流している。

八

次に、『山家集』における、「庵」と「涙に濡れた袖」を取り合わせた歌についてみてみよう。西行にとつては、庵は仏道修行の場であった。それは、「憂き世」としての俗世とは異なる心の安

らく場所ではあったが、仮の住居にすぎず、彼の求める真実の世界は旅にあるという逆説的な意味を持っていた。

田庵聞虫

こはぎさく山だのくろのむしのねにいほもる人や袖ぬらすらん

(卷上秋、四六二)

萩の花と涙を結びつけた歌は、

みなとといふ所を過ぐとてよめる

思ふことなけれど濡れぬわが袖はうた、ある野辺の萩の露かな

(後拾遺集、卷四秋上、二九六、能因法師)

などの前例がある。「田庵」とは、田に来る猪や鹿を追い払うための番小屋をさす。一人庵の中に籠っていて「こはぎ」の中で啼く「むしのね」を聞いていると、秋の寂寥感は一層強まっていく。

月歌あまたよみけるに

あはれたる草の庵にもる月を袖にうつしてながめつるかな

(卷上秋、三四八)

この歌のような「袖の涙に映る月」は、『後撰集』に、袖にうつる月の光は秋毎に今夜菱らぬ影と見えつ、

(卷六秋中、三一九、よみ人しらす)

と詠まれた例がある。『山家集』には他にも、

しらざりき雲井のよそにみし月のかげをたもとにやどすべし

とは (卷中恋、六一七)

ものおもふそでにも月はやどりけりにごらですめるみづなら

ねども

(卷中恋、六三二)

うちたえてなげくなみだに我が袖のくちなばなにに月をやと

さん

(卷中恋、六三五)

つゆけさはうき身の袖のくせなるを月みるとがにおほせつる

かな

(卷下雑、一四二一)

などがあり、これらの歌には、草庵の独居生活を慰めるものとして月が取り上げられている。

西行の草庵生活は、

述懐

あはれしるなみだの露ぞこぼれけるくさのいほりをむすぶち

ざりは

(卷下雑、九一一)

題不知

あばれたる草のいほりのさびしさは風よりほかにとふ人ぞなき

(卷下雑、一一四八)

とあるように、孤独でわびしいものであった。しかし、西行は、

いかにせんかけをはそでにやとせども心のすめば月のくもるを

(卷中秋、三四六)

月にはちてさし出でられぬ心かなながむか袖にかけのやどれば

(卷下雑、一四〇九)

と歌って、自分の心を映す鏡として月を捉え、「澄む」という点で月と心は対照的であるとする。西行の自己の「憂き身」を嘆く

袖の涙は、仏道の世界へ傾斜した心の現れというよりも、美意識

の世界に生きていることを象徴するものであったと言える。

## おわりに

以上のように、露の置く「袖」と同類の、露に濡れる「草の庵」や「岩屋」、波や村時雨の傘のかかる「庵」を対比させて「涙」の持つ意味を際立たせる技法は、『伊勢物語』五十六段の業平の歌あたりからみられる。「草の庵」や「岩屋」や「庵」が盛んに歌に詠まれるようになったのは、憂き世を逃れて出家遁世する人々が増大するようになった『千載集』の頃からであった。そして、これらは仏道修行と結びつけて取り上げられたというよりは、趣向を凝らし理知を働かせて一首の情趣を高めるための歌語として定着していった。

忠度の歌も、業平の歌を本歌としている。業平の歌の恋愛の本意に対し、忠度の歌は、「草のいほ」と「すみぞめの袖」が「露」に濡れる点で同類のものとして捉え、出離当初の不如意さや孤独感から生ずる涙に共感している点、「仮廬」と「袖に置く露」を取り合わせて詠む『万葉集』以来の伝統を踏まえながら、時代の影響を受けた新しさもみられる。

## 注

(1) 西行の法輪寺詠については、柴佳世乃氏「西行と法輪寺―道命との関連において―」(『お茶の水女子大学・国文』第八十二号 平成七年一月)に、詳述されている。

(2) 近藤みゆき氏「隠者文学としての和歌の系譜」(後藤祥子編『王

朝和歌を学ぶ人のために」(『世界思想社 平成九年』)所収)

(3) 「草庵」の変遷についてとまわって述べたものとしては、石田吉貞著「改訂中世草庵の文学」(北沢圖書出版、昭和四五年)に詳しい説明がある。

(4) 松野陽一氏は、「野の草葉に置く露と袖や袂に落ちる涙とを對比、または類同的に扱った作品は、『後撰集』の『我ならぬ草葉もものは思ひけり袖より外における白露』(二二八二 藤原忠國)など例が多い。」と述べられている。(有吉保、松野陽一、片野達郎編『鑑賞 日本古典文学』第十七巻、新古今和歌集・山家集・金槐和歌集) 角川書店 昭和六二年)

(せら もとき 私立岡山県山陽高峯講師)

### 研究室受贈圖書雑誌目録Ⅵ

成蹊國文(成蹊大学文学部日本文学科) 三四

成城国文学(成城国文学会) 十七

成城國文學論集(成城大學大学院文學研究科) 二七

清心語文(ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会) 三

浄大國文(静岡大学文学部国文談話室) 四二

説林(愛知県立大学国文学会) 四九

叢(大谷高等・中学校) 二九

相愛國文(相愛女子短期大学日本語日本文学研究室) 十四

創造と思考(湘南短期大学国語国文学会) 十一

大学院紀要(都留文科科大学大学院) 五

近松研究所紀要(園田学園女子大学近松研究所) 十一

中央国文学(中央大学国文学会) 二十

中央大學國文(中央大學國文學會) 四四

通信(東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所) 九九、

一〇一、一〇二、一〇三

筑波応用言語学研究(筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究

科応用言語学コース)

帝塚山学院大学日本文学研究(帝塚山学院大学日本文学会) 三

二 東海学園国語国文(東海学園女子短期大学国語国文学会) 五八、

五九

東京女子大学日本文学(東京女子大学日本文学研究会) 九五、

九六

同志社國文学(同志社大学国文学会) 五四

東北大学文学部言語科学論集(東北大学文学部言語科学専攻)

四

東北文学の世界(盛岡大学文学部日本文学科) 九

東横国文学(東横学園女子短期大学) 三三

常葉学園短期大学紀要(常葉学園短期大学) 三一

富山大学 国語教育(富山大学国語教育学会) 二六

名古屋近代文学研究(名古屋近代文学研究会) 十八

名古屋平安文学研究会会報(名古屋平安文学研究会) 二六